

孟子の氣象観*

田村 専之助**

もくろく

まえがき

A 自然観

宇宙観, 生命観, 物質観

B 数量観

C 論理

D 技術観

E 氣象観

むすび

まえがき

孔子の政治, 道德思想をうけついで, これを發展させ王道論, 性善説を展開した孟子は, どのような氣象観をもっていたであろうかを“孟子”によって研究してみる。私は自然科学は唯物論的, 数量的自然観が生産技術に働きかけ, 実験によってたしかめられ, 論理的に体系づけられて成立するものと考えているので(拙著東洋人の科学と技術参照), もくろくに示しておいたような順序で話をすすめることにする。

A. 自然観

宇宙観 孟子(B.C. 372—289)はアリストテレスとはほぼ同時代の人であった。今彼の宇宙観をみると

天の高き, 星辰の遠き, 苟も其故を求むれば, 千歳の日至(冬至)も坐るながらにして致(知)るべきなり。(孟子卷第八離婁章句下)

とあるが, B.C. 350年頃19年7閏の法(ギリシャにおけるメトン法)が彼に先だつて既に成立し, 19年の4倍の76年で連大月を配置し, 置閏が周期的にくり返す法(四分暦法)が考えられていた(ギリシャのカリボス法で前者と共にギリシャに先だつ)すなわち中国ではこの頃すでに科学的な暦法が確立していたのであった。この編曆天文学の成果が, 当時一流の知識人であったに違いない孟軻の頭脳にも反映していたのである。いいかえれば当時に於ける世界最高水準の宇宙観を持っていたとい

* Meteorological Opinions of Mencius

** Sennosuke Tamura, 静岡県沼津工業学校—1960年7月1日受理—

えるであろう。

生命観 植物の場合について,

天下生じ易き物ありと雖も, 一日之を暴めて十日之を寒さば未だ能く生ずる者あらざるなり。(卷第十一告子章句上)

とあるのは, 種の発芽には一定の温度が必要とする経験的知識が, 彼に於いても, 常識となっていた, ことを示すものであろうし,

牛山の木嘗て美なりき。その大國に郊たるを以て斧斤之を伐る以て美となすべけむや。是れ其日夜の息ふ所, 雨露の潤す所, 萌蘖の生ずるなきにあらざるも, 牛羊又従ひて之を牧す, 是の以に彼の如く濯濯たるなり。人その濯濯たるを見て, 以て未だ嘗て材あらずとなさむも, 此れ豈山の性ならむや。人に存する者と雖も豈に義の心なからむや。その其良心を放つ所以の者も, 亦猶斧斤の木に於けるがごときなり。且且に之を伐らば, 以て美となすべけむや。其日夜息ふ所の平且の気あるも, 其好悪人と相近きもの幾ど希なるは, 則ち其且蠶の為す所有之を措し亡はしむればなり。(同上)

とみえる記載においては, たとえ話にもせよ植物の生育には日夜の気と雨露すなわち, 日照, 気温, 降水のいわゆる氣象の三要素が必要であることが適確に指摘されていて, 卷第三公孫丑章句上にみえる宋人が苗の成長をたすけるために, 物理的な力を加えて引きのばしたという話は, ばかばかしい徒勞のたとえにすぎないが, 卷第一梁惠王章句上“(民を使ふに)農時を違(奪)はざれば, (五)穀勝て食ふべからず数罟涸池に入らざらしめば, 魚鼈勝て食ふべからず, 斧斤時を以て山林に入らしめば, 材木勝て用ふべからず。”とみえるのは播種, 生長期に対する強い関心を示すものであり, やがて戦国末から漢代にかけて流行した時令思想の先駆となったものである。

つぎに動物観をみると, まづ

夫れ(蚯蚓)は上槁壤(乾土)を食ひ, 下黄泉(地中の水)を飲む。(卷第六滕文公章句下)

とある。もとよりミミズは土壤自体を食うのではな

く、土壌中に含まれている植物その他の有機物を食うのであるが、土を食うとみても、上代人としては、すなおな観察が根柢にあるといえよう。ところが

麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける、大山（泰山）の丘垤に於ける、河海の行潦に於ける、類なり、聖人の民に於けるも、亦類なり。（卷第三公孫丑章句上）

では麒麟や鳳凰は祥瑞思想の産物にすぎない架空の動物であるのに、實在のものとして、その哺乳類、鳥類における地位を聖人の人間一般における地位にあてているのは、当時の一流の思想家の水準を示すものといえよう。また

孟子曰く、人の禽獸に異なる所以の者幾（殆）と希し。庶民は之を去り、君子は之を存す。（卷第八離婁章句下）

君子曰く、此れ亦妄人なるのみ。此の如くんば、則ち禽獸と奚ぞ扱はむ。（同上）

は人間も動物一般と同じ仲間とみる唯物論思想などでなく、礼を説くのが重点で礼を知らないものは禽獸に近いとされている。彼においては礼を知るのは士大夫以上で、庶民は礼を知らず、したがって禽獸に近いものとされているのである。

物質観

孟子曰く、水は信に東西を分つなきも、上下を分つことなからむや、人の性の善なるは、猶水の下きに就くがごとし。人善ならざるあるなく、水下らざるあるなし。今夫れ水は、搏ちて之を躍らさば額（額）を過ぎしむべく、激して之を行れば、山に在らしむべし。是れ豈水の性ならむや。其勢則ち然るなり。

（卷第十一告子章句上）

民の仁に帰するは猶水の下きに就き、獸の壙（広野）に走るがごときなり。（卷第七離婁章句上）

孟子曰く（中略）水を観るに術あり、必ず其瀾を觀よ、日月に明あれば、容光（小隙）も必ず照せばなり。流水の物たるや、料（窺み）に盈たざれば行かず。君子の道に於けるや、章を成さざれば達せず。

（卷第十章尽心章句上）

孟子曰く（中略）江河を決きて沛然たるが若く之を能く禦（止）むるなきなり。（同上）

などと水を取りあげた例が多いが、水に道德観を托することは、一つの流行であったようで、孔子にも（論語、雍也第六、子罕第九・孟子第八離婁章句下）、“老子”にも（八章、六十六章）それがみられる。水がひきあい

にだされるのは自由に形を変えること、低い方へ流れる性質のあること、などによるであろう。しかし、だからといって水とは何なのか、なぜそうなのか、水以外にそういう性質のものはないのか、などということは、まるで興味をひかず、ターレスのような宇宙間の原質は水である、というやうな、自然哲学のかけらも見られないのはもとより、管子のような生産からみちびかれた“水者何也、万物之本原也、諸生之宗室也。”（管子第十四、水地第三十九）というような思想の片鱗もみえない。

また

紫を惡むはその朱を乱るを恐るればなり。（卷第十四尽心章句下）

とあり、朱のような明色はよごれ易い事実の適確な認識が根柢にみられる。ただし、これも論語・陽貨第十七に“子曰く、紫の朱を奪ふを惡む、”とあり、まえの水の場合と同じく論語からとったか、或は実は逆に儒学が官学にされた前漢の初期（B. C. 1, 2）に現在の論語が編纂されたとき、孟子から採ったかは問題である。

最後に

且つ天の物を生ずるや、之をして本を一にせしむ、而るに夷子は本を二にする故なり。（卷第五子文公章句上）

とあるのに注意すると、夷子は人の行為の動機を複数とみるが、天が万物を造る場合の動機は単数であるとしている。すなわち万物は天の単数の意志によって作られるというのである。また油然と雲をおこすのも天の意志である（卷第一梁惠王章句上）とされている。これを管子（卷一乘馬第五、第四宙合第十一、卷一三白心第三十八、第二十三地数第七十七）や荀子（卷一天論）などにみられる自然は自律作用をするという思想や王充のように万物は自然の自律作用によって、おのずからできる、とする思想（拙稿王充の氣象観、史観57, 58）などにくらべると、孟子の自然観全体の性格がはっきりわかる。また“(孟子)曰く、臣之を胡齧に聞けり。曰く、王堂上に坐せるとき、牛を牽きて堂下を過ぐる者有り。王之を見て曰く、牛何くに行かむ。對へて曰く、將に以て鍾（鐘）に響らむとす。王曰く、之を舍け。吾その殺鍾若として罪無くして死地に就くに忍びざるなり。對へて曰く。然らば則ち鍾に響るを屠めむか、曰く。何ぞ屠むべけや。羊を以て之に易へよと、知らず諸有りや。”

（卷第一梁惠王章句上）でみられるように、目前の牛を羊にかえた点だけをとりあげ、鐘に血をぬる、という当時としては神聖な儀礼であったマジコレリジスな原始

の習俗自体に対しては、孟子は何んの疑問ももたず、批判もしていない。これはまさしく彼の自然観の限界を示すものである。

B. 数量観

“孟子”にはするどい数量観はみえず、わずかに“質とは数歳の中を校べて以て常となす。”(巻第五滕文公章句上)において数歳をはかりくらべる、ということ、すなわち平均という思想がみえるにとどまる。

C. 論理

まず

告子曰く、生これを性と謂ふ。孟子曰く、生これを性と謂ふは、猶白これを白と謂ふがごときか。曰く、然り。羽の白きを白しとするは、猶雪の白きを白しとするがごとく、雪の白きを白しとするは、猶玉の白きを白きとするがごときか。曰く、然り。然らば、則ち犬の性は、猶牛の性のごとく、牛の性は猶人の性のごときか。(巻第十一告子章句上)

とあるが概念の意味を明らかにしようとしている論理性は“論語”にはみられないところであって、論理性の高い“荀子”の正名篇えいたる過渡的な性格をよくあらわしている。また、

詩に、天の蒸民を生ずる、物あれば則あり。民の夷(性)に乗(順)ふや、是の懿徳(美德)を好むといへるを、孔子は、此の詩を為れる者は、其れ道を知るか、と曰まへり。故ち物あれば必ず則ありとすれば、民の夷に乗ふや、故もり是の懿徳を好むべきなり。(巻第十一告子章句上)

では物の則は人の性にあたるもの、とせられている。人と物を対立物として、とりあつかうことは荀子の解蔽篇に“凡以知人之性也、可以知物之理也。”とあり、ここでも“人之性。”と“物之性”とが同じ位置のものとされているが、ここの詩や孟子の“物の則”とこの荀子の“物の理”とは同じ意味のものと断ぜられる²⁾。すなわち、これはおうごっぱながら自然界の法則ということにちがいない。ただしそれを追究しようとする態度は少しもみられない。人の性は美德をこのむという点ばかりが論ぜられてい、“学問の道は他なし、其放心を求むるのみ。”(巻十一告子章句上)と道德的側面ばかりが強調されている³⁾。

D. 技術観

自然界と取りくんで、文化を造って行く“技術”がど

うみられていたか

孟子曰く、離婁の明、公輸子の巧も、規矩を以(用)ひざれば、方員を成す能はず。師曠の聡も、六律を以ひざれば、五音を正す能はず。(中略)聖人既に目の力を竭し、之に繼ぐに規矩準繩を以てす、以て方員平直を為ること、用ふるに勝ふべからず。既に耳の力を竭し直之に繼ぐに六律を以てす、五音を正すこと、用ふるに勝ふべからず。(巻七離婁章句上)

孟子曰く、規矩は方員の至なり。(同上)

孟子曰く、羿の人に射を教ふるは、必ず彀に志す。学ぶ者も亦必ず彀に志す。大匠の人に教ふるには、必ず規矩を以てす、学ぶ者も亦必ず規矩を以てす。

(巻第十一告子章句上)

孟子曰く、大匠は拙工の為に繩墨を改磨せず。(巻第十三尽心章句上)

孟子曰く、矢人は豈函人より不仁ならむや。矢人は隼人を傷けざらむことを恐れ、函人は隼人を傷むことを恐る。巫匠も亦然り。故に術(枝)は慎しまざるべからず。(巻第三公孫丑章句上)

孟子曰く、梓・匠・輪・輿は能く人に規矩を興ふるも、人をして巧ならしむることあたはず。(巻第十四尽心章句下)

などにおいて、にじみでているのは技術及び技術的知識を高く評価し、尊重する精神である。これをいやしいものとした論語にみられる孔子の技術観⁴⁾とは非常なちがいである。この点では孟子は一步前進したというべきであろう。

E. 氣象観

まず

今夫れ麩麦(大麦)、種を播きて之を覆(覆)はむに、其地同じく、之を樹うるの時も又同じければ淳然として生じ日至(夏至)の時に至りて皆熟さむ、雖(若)し同じからざるあらば則ち地に肥磽(肥瘠)あり、雨露の養、人事の齊しからざればなり。(巻第十一告子章句上)

とあるのは地味と気候、氣象と、これに咬みあう農業技術とについて、当時の知識人としてはきわめて当然な認識である。

孟子曰く(中略)旱乾水溢あれば、則ち社稷を變めて置つ。(巻第十四監心章句下)

は農作と重大な関係のある異常氣象に対する厳肅な宗

教的儀礼であって、論語郷党第十に“盛饌あるときは必ず色を変じて作つ、迅雷烈しきときも必ず(色)を変ず。”とも相通ずる原始的氣象観であり、殊に孟子の方の根柢には君主の行為と自然現象との間に相関関係があるとする心理がみえる。

民の之を望むこと、大旱に雲霓を望むが如くなり。

(巻第二梁惠王章句下)

における霓(にじ)は雨の結果あらわれるもので、この場合は修辞にすぎず、雨をふらせるものとしての雲が望まれたのであって、卒直に“大旱に雨を望むが如くなりき。”(巻第六滕文公章句下)というのと同じである。五風十雨が望ましい氣象状態とすれば、大旱に雨を望む、とは、はげしい慾望のたとえとしてふさわしい。

王夫の苗を知るか。七八月の間、旱すれば則ち苗穉れむも、天油然として雲を作し、油然として雨を下さば、則ち苗淳然として興きむ。(巻第一梁惠王章句上)

という現実からきたものであり、したがって“時雨の降るが如くにして民大に悦べり。”(巻第一梁惠王章句下)、(巻第六滕文公章句下)といわれるのにもふしぎはない。農業民族として、あのような土壌、あのような氣候条件のもとにあるものとして、きわめて当然な心理であろう。

かような心理が政治思想にとりいれられると

孟子曰く、君子の教ふる所以の者五つ、時雨の之を化するが如き者あり(下略)、(第十三尽心章句上)

ということにもなる。また

孟子曰く、子過てり。禹の水を治むるは、水をこれ道けるなり。是の故に禹は四海を以て壑となせるも、今吾子は鄰国を以て壑となす。水逆行する、之を洚水謂ふ。洪水とは洪水なり。(巻第十二告子章句下)

堯の時に当り、水逆行して中国に氾濫し、蛇竜之に居り、民定(居)る所なし。下者^{ひくきところのひと}は巢を為り、上者^{たかきところのひと}は宮窟を為る。書に曰く、洚水余を警むと。洚水とは洪水なり。(堯)・禹をして之を治めしむ。禹地を掘りて之を海に注ぎ、蛇竜を駆りて之を菹(草沢)に於つ。水地中によりて行く、江・淮・河・漢是れなり。險阻既に遠ざかり、鳥獸の人を害する者消(除)かれ、然る後人平土を得て之に居る(巻第六滕文公章句下)。

堯の時に当りて、天下猶未だ平かならず。洪水横流し、天下に氾濫す。草木暢茂し、禽獸繁殖し、五穀

登らず、禽獸人に偪り、獸蹄鳥迹の道、中国に交はる。(巻第五滕文公章句上)

ということになる。氣象災害特に降水の過多、過少にくるしめられた民族としていろいろ旱魃伝説のほか、上記のような洪水、治水伝説がつくられるのにふしぎはない。けれども理想的聖天子と考えられた堯の世にすら、それがあつたとされている点、印象の強さを示すものとして注意すべきである。

“天油然として雲を作し、油然として雨を下す。”(巻第一梁惠王章句上)、“大旱に雲霓を望む。”(巻第二同上下)になけるように雲が雨を降らせる、とするかぎりにおいては、原始的な観察にしかすぎず。由来、上代中国人は自然の構造や機能などの探求には興味をもたなかったのである。

つぎに

詩に云く、天の未だ陰雨せざるに迨(及)びて、彼の桑土を徹(取)り、牖戸を綯繆へり。(巻第三公孫丑章句上)

を引き、孔子に“此の詩を為れる者は、其れ道を知れり。”といわせているが、この詩は詩経・豳風の鷓鴣のであって周公が鳥のことばに托して悪人が王室をそこなおうとするのを防ごうとする志をのべ、王におくったもの、とされているが、もとより話通りにうけとるべきではないが、所詮思想の産物、概念の産物であって、ここから直接に生物氣象などをとりだそうとするのは無理であろう。

孟子將に王に朝せむとす。人をして来らしめて曰く、寡人如(將)に就きて見むとせるも寒疾あり、以て風るべからず。(巻第四公孫丑章句下)

ではかぜをひいて熱があるので、風にあたりたくない、ということにすぎない。また

今天下に敵なからしむことを欲して、仁を以(用)ひざるは、是れ猶熱(暑)を執(救)はむとして濯(浴)を以ひざるがごときなり。詩に云く、誰か能く熱を執ふに、濯を以てせざらむと。(巻第七離婁章句上)

とある。ここでは詩にもとずいて、暑い時入浴すればせいせいして気もちがよい、という例をとっている。これらの言説は病理氣象学、生理氣象学的な經驗的な平凡な事実によっているにすぎない。また“君子の徳は風なり、小人の徳は草なり。草は之に風を尙ふれば必ず偪す。”(巻第五滕文公章句上)は大人の徳には小人はなびくものだという幼稚なたとえにすぎず、どちらがどちらによ

ったかは問題であるが、このことは論語顔淵第十二にもある。

周公、武王を相けて、紂を誅し、奄を伐ち三年にして其君を討(誅)し、飛廉を海隅に駆りて之を戮す。(巻第六滕文公章句下)

むしろ、この飛廉は紂の臣としてではあるが、孟子とほとんど同じ時代の楚辭の離騷、(遠遊)などには風の神としての飛廉がみえ後世も、もっぱらそうになっている。孟子にみえるような紂の臣としての話が何時つくられたかは明らかでないが、すでに理想的聖天子として机上でつくられた堯舜に対立するやうに桀と一組につくられたものである以上、この飛廉も本来風の神と別なものではあり得ないと私は考える。すなわち紂の臣としての飛廉もはじめから風の神であったに相違あるまいというのである。

政治、道徳以外に考へることを知らない儒家にあっては、すべての自然現象と共に氣象要素も聖人によって支配され、征服されている⁵⁾。かやうなところから“風は空気の流れである”(アナクシマンドロス)などという科学的探求などは思いもよらない。

つぎに“是れ猶湿を悪みて下きに居るがごとし。”(巻第三公孫丑章句上)とあるのは、水は低い方へ流れるという認識から低地は土壤水分が多いと結論したもので、幼稚ではあるが正しい自然観察が土台になっている。

む す び

孟子は有名な性善説、王道論を提唱し、“孟子対へて曰く、(中略)一夫紂を誅せるを聞けるも、未だ(其)君を弑せるを聞かざるなり。”(巻第二梁惠王章句下)という禪讓放伐思想を提示し、“曰く、君過あれば則ち諫め、之を反覆して聴かざれば則ち去る。”(巻第十萬章句下)と、臣として君主につかえる場合の限界を示した思想家ではある。しかし B.C. 二世紀半ば儒学が官学にされてよりこのかた最近までもつばら孔子、孟子だけがもてはやされてきたが、今新しい立場から静かにふり返ってみると孟子より、むしろ、堅実な唯物論的な自然観を持っていた管子、荀子や⁶⁾皆勞の理想的政治が行われれば經濟界も合理的になり物価も安くなる、すなわち搾取を否定し、民衆の皆勞を基盤とする、孟子と同じ時代の人許行の思想⁷⁾などこそ注意すべきものと考えられる。孟子にも孔子よりも数歩前進した技術観もあり、唯物論的自然観や論理性などまったくなくはないが、濃度が低

く、それは何か、なぜそうなのかというやうな自然界に対する追及の態度がないのはもとより、すべてが例によって政治や道徳の思想に覆われている。氣象観もまた上記から一步もでるものではなかった。自然科学えの何等の萌芽もみえず、孟子も科学史的にはあまり意味のないものであったことは孔子と同じである。かような否定的な結論をきらう風潮も学界のかたすみにはなしとしないが、否定もまた弁証法的に重要な結論である、と私は信ずる。とくにそれが常識的見解の否定、偶像の破壊のような場合においてそうであろうと思う。

(註)

- 1) 引用した文の上は“孟子曰く、夫の夷子は信に人の其兄の子を親しむこと、其鄰の赤子を親しむが若くすべしと以為へるか、彼は取ることありて爾(いへ)るなり。赤子の匍匐して將に井に入(墜)ちむとするは、赤子の罪に非ざるなり。”(孟子巻五滕文公章句上)である。
- 2) 私には津田左右吉博士及び粟田直躬氏の研究は貴重な他山である。この研究に於いては津田博士の“論語と孔子の思想”粟田氏の“中国上代思想の研究”を熟読した、私の研究と比較して御批判をねがいたい。
- 3) 学問といわれる以上知識的なものであるべきであるが孟子の学の内容は“堯舜の道は孝弟(悌)のみ。”(巻第十二告子章句下)とか“仁義”というやうな、もつばら道徳的事項である。
- 4) “吾少かりしとき賤しかりき、故に鄙事に多能なり、君子多ならむや、多ならざるなり。”(論語子罕第九)などにおける技術をいやしいものとする孔子の技術観をみるがよい。
- 5) かの尙書金縢篇の“秋大熟未穫、天大雷電以風、禾尽偃、大木斯拔、邦人大恐(中略)王出郊、天乃雨反風、禾則尽起。”という記載も呂氏春秋巻九順民に堯が旱魃に際して爪と髪とをもって自分の肉体にかえて犠牲として雨を祈ったところが雨が大いに降った、とあるのも王がマジコレリジラスな儀礼によって氣象を支配するとしたよい例である。私は孟子のこの場合においても同じ精神が見られると思う。“氣象観”に引いておいた尽心篇の記載もあわせて考へべきである。
- 6) 拙稿“管子及び荀子の氣象観”参照。
- 7) 許行の思想は“孟子”滕文公章句上にみられる。